

# 第14回むつ市総合教育会議議事録

開催日時: 令和3年4月29日(13:00~15:10)

開催場所: むつ市 下北文化会館大ホール

出席者: 宮下 宗一郎 市長  
阿部 謙一 教育長  
田中 志昌 教育委員  
納谷 順子 教育委員  
黒木 和之 教育委員  
長岡 俊成 教育委員

事務局 教育委員会 角本 教育部長  
鷲岳 政策推進監  
工藤 教育委員会総務課長  
祐川 副理事(学校教育課長)  
畑山 生涯学習課長  
木村 中央公民館長  
櫻井 副理事(図書館長)  
新田 総務課主幹  
対馬 総務課主幹  
佐藤 総務課主任  
関 総務課主任  
佐藤 学校教育課総括主幹  
齊藤 学校教育課主任指導主事  
谷川 生涯学習課主幹  
笹谷 中央公民館主任  
村市 図書館主任



# 1. 開会

**事務局：** 時間となりました。ただ今から第14回むつ市総合会議を開催いたします。

本日は、市民の皆様と一緒に講演会を聴講していただきます。

講師には、陰山ラボ代表で教育クリエイターであります陰山英男氏をお迎えし、「常識を破れば子どもは伸びる」と題して講演いただきます。

講演に入ります前に、むつ市総合教育会議議長でありますむつ市長宮下宗一郎がご挨拶いたします。

それでは、宮下市長お願いします。

**宮下市長：** 本日は皆様お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

また、陰山先生におかれましても、このむつ市総合教育会議にご参加いただきご指導仰ぐことを心から感謝申し上げます。

現在の、むつ市総合教育会議ですけれども、むつ市の教育大綱という、教育の大元になる計画を作るために、市長中心に、教育長、教育委員会の皆様と共に合議する中で策定していくものでございます。

5年前に策定してちょうど今見直しの時期になっているとのことで、虚心坦懐で現在の教育の状況そして未来に向かってどのような新しい方針が必要なのか議論を深めていくところでございます。

私は、むつ市の行政、様々重要事項ありますけれども、この教育というものが常に最優先課題であるという風にとらえています。そして、私自身もこの教育行政を担っている一員だという風に感じる事が出来る時、一番充実した気持ちになるときです。と申しますのは、子ども達が常に無限の可能性を私たちに提示してくれています。昨日も大湊中学校の生徒さんたち私の

所に表敬に来てくれたんですが、三行詩という分野で、全国でナンバー1、優勝したということで報告がありました。また、1年過ぎてみますと各小中学校で全国大会にスポーツ、作文コンクールなど様々な部分で子ども達は活躍してくれています。

一方で私たちの地域というのは、様々な産業もそうですが、制約が非常に多い地域だと思っています。そうした制約を大人達の方で、力を合わせて取り払っていくことも必要なことだと思います。

私たちの最大の課題というのは、学力の向上だと思っています。この環境が、どんどん悪化をしているというのが今のむつ下北の現状でありまして、と申しますのもやはり高校が全入という形になっています。希望する子が大体入れるそのような状況になれば、競争が起こりません。健全な競争なくしてなかなか子ども達というのはいい成長がない。もちろん過度な競争は子ども達を締め付けることもありますけれども、健全な競争がない環境の中では、なかなか子ども達は成長しないということがあります。公表ももちろんされていないデータであります。それが顕著に出ているのが高校入試の点数です。ほかの圏域に比べて圧倒的にやっぱり低い状況にこの圏域の子ども達がなっている。そういう状況が、いまこの私たちの地域に重くのしかかっている現状だという風に思っています。

ただ、一方で明るいニュースもあり、おととしですか、去年かなありました、田名部高校からまさか高校という、医学部進学特進コースを経て東京大学に入学してくれた志学生もいました。彼女自身が私たちの企画があったから東大に行ったということではないと思います。もちろん個人の能力があると思いますけれども、学力の面でもやっぱり私たち下北むつ市の子ども達しっかりした環境を整えれば必ず伸びてくれると信じています。いい大学行けば、東大行けばそれでいい人生送れるという世の中ではあ

りません。一方で基礎的な学力というのはどの場面でも社会で求められているものですし、それを地域のあるいは私たちの大人の環境の制約なくして、子ども達にしっかりと身につけさせるのも私たちの責務であるという風を感じています。

今日は、陰山先生をお招きして、学力の向上、家庭、地域、学校のありかたというところまで話が及ぶと思います。まずは、子ども達に勉強させる前に、私たちがしっかりと勉強して、子ども達の環境をしっかりと整えていきたいと考えておりますので、今日一日で虚心坦懐、今までの思い込みを捨てて、陰山先生のお話をしっかりと聞いて、私自身も勉強していきたいと思っておりますので、最後までみなさんどうぞつきあいいただきたいと思っております。

冒頭挨拶は以上とさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

**事務局：** 出席者紹介  
(市長ほか、席移動)

**事務局：** それでは、本日の講師であります、陰山英男氏をご紹介いたします。

陰山氏は、小学校教師時代に反復学習や規則正しい生活習慣の定着で、基礎学力の向上を目指す「陰山メソッド」を確立され、脚光を浴びました。

2003年(平成15年)4月広島県尾道市立土堂(つちどう)小学校校長に、全国公募により就任。百ます計算や漢字練習の反復学習を続け、基礎学力の向上に取り組むかわら、そろばん指導やICT機器の活用など新旧を問わず積極的に導入する教育法によって子ども達の学力向上を実現しております。

近年は、ネットなどを利用した個別の小学生英語など、グローバル人材の育成に向けて提案や実践などに取り組んでおられます。

現在、陰山ラボ代表、一般財団法人基礎力財団理事長の職に就き、また、教育クリエイター

として活躍し、子ども達の学力向上に成果を上げております。

以上で、陰山英男氏の紹介を終わります。陰山先生ご講演よろしくお願ひします。

## 2. 講演

本日はこのような形でお招きいただき、ありがとうございます。このようなコロナ対応の中でのオンラインの講演は今度が初めてで、この声が皆さんに伝わっているのか、午前中にスタッフと打ち合わせ等念入りにやりましたが、不都合がありましたら連絡下さい。

コロナ禍の中で日本中の学校が、昨年度の3月から5月まで休校余儀なくされ、授業時間数が足りなく中で、それを補う実践が行われたと思います。私自身もこういうところに関わりながら、日常ではない時だからこそ、普段では出来ない挑戦もあるのではないかとということで、福岡県の田川市とか飯塚市の市と連携しながら地域あげて実践をして参りました。その結果、今日お話しさせていただくのは、そもそも、子ども達の教育であるとか、学力向上について、まだまだ分かっていなかったということがたくさん出てきました。そのことをこれから申し上げようと思っておりますが、データを画面で共有化していただきながらやっていこうと思っております。

「常識を破れば子どもは伸びる」、副題としてチャレンジングなことを書かせてもらいました。「漢字の書き取りのノルマをやってはいけない」。日本全国どこでもやっている、漢字を1ページやってきましょう、10回書きましょうみたいな宿題があるかと思うんですけど、これは、漢字の覚え方としては、能率が悪いどころか、これをやるから漢字を覚えられなくなる。最近そんな風に思うになりました。きっかけは、30、40年前前から勤務しておりました兵庫県の山口小学校というところなんです。(画面の)右上の城跡の景色見られたことがあるかもしれま

せん。天空の城、竹田城というところですよ。兵庫県の山の中にありますが、その麓の小学校です。旧朝来町でございます。奇しくも市長さんがおっしゃったことと同じことが、30年前、兵庫県教育委員会が各地域毎の高校入試の結果を公表しましたところ、なんと、山口小学校の地域が県下でもほぼ最下位という状態になったことであります。中学校の先生方が、各地域を回って土下座してお詫びしたということがあります。それがちょうど3月です。4月に山口小学校に赴任しました。辞令交付式は、普通華やいだ雰囲気であるのが普通ですが、桜の咲く中、重苦しい雰囲気の中で、山口小学校の実践がスタートしたのを覚えています。今でも忘れませんが、教育長が振り絞る声で、「学力をつけてほしい。」と、真剣におっしゃったことが今でも心に残っています。そこから、私が従来から研究していました、読み書き計算の反復学習とか生活習慣の改善ですね。これを先生方、地域と一体となって進めていくこととなります。すると、1年2年3年と経つうちに、驚くことがおきてきました。それは、従来では考えられないほど子ども達が伸びていったわけです。(画面の)右下にあります下のグラフ、算数の数量関係というところ見て下さい。145という数値が出ています。これはですね、速さ時間距離とかパーセントなど、小学校の算数では一番難しいといわれるところが、全国平均が100とした場合に145という、とてつもない高い数値を出したわけです。実際、私たちが子どもを指導して行ってですね、単に賢いというレベルでは言えないくらいすごい力を持ってしまったなど感じました。それから、この子達がこれからどうなっていくんだろうか。ということを考えていましたところ、卒業して6年経って大学入試に挑戦します。浪人生を含みますが、結局50名のうち7名がトップ校という大学に合格していきました。北大農学部が1人、東北大医学部が1人、神戸大医学部が2人、京都府立医大が1人、大阪大学理学部が1人、名古屋大学

の医学部が1人、ということで圧倒的な結果でした。普通の塾や予備校の中の成績といってもよく、どこに出しても恥ずかしくない高い結果だと思いますけれど、これは、皆様と同じ、普通の小学校の、普通の子どもの一つの学年の成果であります。皆さんに注意していただきたいのは、公立小学校の実践なので、難関大学突破の勉強をさせるはずないです。教材もありません。ただただやるべき事を徹底していく。読み書き計算徹底してやっていくことで、こういうことが見えてきました。ですから、こういうことが多くのところを広がって行って、近年では福岡県の筑後地区、地域的にも厳しく、よく言われたのが、生活保護の家庭も多く、地域的にもいろんな問題を抱えていると。今時に言うと、家庭の収入が低いと、子どもの学力も高くないみたいなことを言われますけれど、そういうことが本当に当てはまるのであれば、お先真っ暗な地域でありました。そのことは、30年前の朝来、山口小学校にも言えることであります。しかし、そういうことではないということが、私自身実践の中で感じたことです。

では、どんなことが起きたのか解説していききたいと思います。

(画面で)ここに、漢字の習得率があります。全国平均です。1年生くらいであれば黒い方はちゃんと書けるかというデータですが、1年生が漢字書けるかというところ9割ぐらいですが、4、5、6年生になってくると6割くらいしか書けない。6割くらいしか書けないということは、読む力というのも弱く、最近教科書を読めない中学生、高校生を指摘される論調もありましたけれど、昨日今日始まったことではありません。私が校長をやり始めた頃から中学や高校の子ども達が教科書を読めない、もうちょっと言うと小学生でも高学年になってくると、詰まることなく教科書を読めるというのは、半数も入れば良い方です。放置していると必ず詰まります。何で詰まるかというと、きわめて単純明快、漢字の読み書きが出来ないからです。そこで、漢字

やりましょうということで5回じゃ足りないから10回しましょうという指導がなされますが、絶対やってはいけないことです。なぜかという、10回書きなさいという10回書くことが目的になってしまうからです。要領のいい子は、最初、「へん」ばかり10回書いて、そのあと「つくり」を10回書いて、10回書きましたと言います。それは10回漢字を書くときに漢字のことを一切考えないと言うことです。それは学習でなく、作業です。漢字を書きながら漢字のことを考えない、このことは子ども達が漢字を覚えなくしてしまう理由です。

ところが、うまい結果が出ないと、日本の学校というのは、やり方は間違っていない、努力が足りない。昭和の考え方見たいに言いますが、成果が出ないと努力が足りない。10回書いてもだめなら20回書こうという世界に入ってしまう。絶対にやってはいけません。絶対にだめです。それはですね、覚えられない練習をしてしまうからです。細かい練習をお話しする時間はありますが、ユーチューブの方に具体的なやり方についてアップしていますので、ご確認していただければと思います。

ポイントを言いますと、重要なのは、子ども達が漢字をいつ覚えるかということをお頭に置いて、漢字を履修させることです。皆さん、子ども達が漢字を覚えやすい時間帯、瞬間とはいったと思いませんか？。意外と考えたことないですよ。ですから多くの学校は授業の中で漢字を教え、書き順はこうだよと教え、子ども達に書かせて、宿題に出して、翌日漢字テストをしています。これはだめです。なぜだめかというと、子どもが漢字を覚える瞬間は、最初の一字を書く時です。ですから、最初に書くときに、一発で覚えようという意識を高めてやる事をやらないと子どもは覚えてくれません。宿題をやらせて翌日テストということになれば、最初の時、子ども達はしおれてしまいます。そして、宿題をやるときは、さっき申したとおり、回数だけ書けばいいやとなりますので、ここで

も覚えません。翌日テストを実施しても、覚える気がなかった子というのは、いくらやってきたとしても、覚えられません。ここで決定的なことが起こります。自分はいくら書いてもだめだ。という子どもの思い込み。先生の方にも、この子はいくら勉強させても出来ない。という思い込み。このことによって、子どもは伸びないということをしり込まれてしまいます。このことこそが、子どもが勉強できなくなる最大の理由です。子どもが出来なくなる理由は、能力の問題ではありません。遺伝でも頭の善し悪しも全く関係ありません。学習のやり方の問題です。ですから、指導して結果が出なければ、努力が足りないと考えるのではなく、やり方を変えてみる。それが重要だということです。

それを福岡県田川市の学校でやってもらいました。そして、こういう結果が出てきました。大変驚きました。私の教える指導方法をビデオに撮って市内の先生全員に見てもらい、今年から漢字の指導方法は陰山先生のやり方に習ってやって下さい。ということをお話しました。そして、漢字の習得を見たところ、年度末の1月の段階で市内の子ども達の平均点が90点近くまで伸びました。これは一昨年の結果ですけれど、昨年度というのは、子ども達が学習の仕方を分かっているため、休校期間中に1年分の漢字を習得してしまい、6年生は学校で一切指導されていないにもかかわらず、市内で平均80点に達成していました。つまり子ども達は自分の力で主体的に1年分の漢字を80パーセント覚えていたということです。

さらに驚くことが続きます。その指導方法を特別支援学級に織り込んでいった倉敷の小学校。

(画面の)左にあります、2年A、B、Cこれ子どもの名前なんですけれど、5月の段階では5点、0点、10点、いい子でも75点という子ども達だったのが、年度末にはほとんどの子ども達が、90点、100点という結果になっています。さきほど、頭の出来不出来は関係

ない、やり方を変えれば出来ると言いましたが、こういう数値的な裏付けが出来ています。倉敷の学校は、私も参加して研究会を開いたわけですが、倉敷市教育委員会の特別支援のチーム、7名ほどいますが、全員がこの様子を知らされていませんでした。学力支援になぜこのチームが入っているのか訪ねたところ、この結果が知らされていたという訳です。本当に驚きました。

では、どうすればいいのか。重要なのは、1年分の漢字を年度初めに一気に教えてしまいます。そんなこと覚えられないでしょ。だって、10、20のテストやっても30点、40点しか取れないのに。そう思うかもしれませんが、糸魚川市で模範授業しました。その学級には、どんなに先生がついて指導したとしても100点満点で30点が精一杯という子がいました。放っていけば0点10点しか取れない子がいました。しかし、1時間私が教えて、子ども達に、すぐテストするよって言うと、子ども達はやらざるを得ませんよね。私はマンツーマンでその子に付き、7回高速に書けるまでやらせました。私が見つけた法則ですが、1文字あたり、3秒から5秒で書けるようにならないと、子どもは漢字を書いても忘れてしまいます。時間をかけて書けました。花丸です。でも、これじゃダメです。一度書けるとゴールと思ってしまうからです。違うんです。スタートラインなんです。3秒とか5秒で書けるように練習していくためのスタートラインです。そのように指定練習すると、その子は学級の中の上位で、課題として与えた漢字を全部覚えてしまいました。伝説の授業とまで言われるようになりました。

やり方を変えるとそこまで伸びる。しかし、子ども達は一度覚えて放っておけば忘れていきます。しかし、最初教えたことを忘れたとしても、どんどん、年度初めにやっておけば、来年の3月までに繰り返して覚えさせれば良いわけですから、実際やってみると11月位になると、漢字の宿題が無意味になる位に完璧に覚えます。どんな漢字テストをやってみたとしても、10

0点という学校があります。そんなことあり得るのかと思われるかもしれませんが、冷静に考えて下さい。1年間で習う漢字は何文字かというのと、約200文字なんです。3年生4年生が多いです。5年生6年で180文字と少し下がります。これを原稿用紙に書いたら何枚分になりますか。半分ですよ。写経のごとく原稿用紙半分の字を100回続けて覚える練習したら、完全に覚えることは難しくないでしょう。これがある学校で3年生4年生を対象に12月22日にやってもらったら、できが悪かったが、冬休みと1月を集中して練習してもらおうと、2月9日のテストでは、全ての子ども達が90点以上取るようになりました。このように、一時期に集中して練習するというのが効果的です。

(画面で) 校長やっていたときのデータですが、5年生が80点くらい取っていますね。それぞれの学年の漢字テストが普通に80、90点取るようになってくると、全てのテストの点が上げてきます。なぜかという、教科書がすらすら読める、自分は勉強が苦手ではないという自己肯定感、何よりも3秒5秒で書くことが出来る、俗に言われる頭が良くなったということです。(画面で) そこにある本の表紙は、その時に使う教材です。やり方は、これらの教材を使っただけで事が必須になります。なぜなら、教材と学習方法は裏表の関係です。違う教材を使っただけでこのやり方をやっても効果は出ません。そここのところも是非知っていただきたい。

田川市は、コロナ過の中で、もう一段踏み込んだ実践をしました。相談を受けて、やっていいのではないかと提案しました。それは何かという、1年分の全ての学習を休校期間中に予習をしてしまう。聞いただけだと、ハッと思うかもしれませんが、子ども達は漢字や百ます計算の力が高まってくると、頭の回転というものが高まっています。その力を持ってすると、1年分の学習であっても、それがまとめられたものであれば、子どもは自分で進めていくこと

が出来ます。そこで、田川市の市長と市議会にお願いし、1年分の学習をコンパクトにまとめた、たったこれだけプリントというものがあります。私が監修して作ったものですが、それを4月全員に配ってもらいました。私としては、うれしいことではありますが、反面非常に怖くもありました。公費を使って全ての子ども達にこういう指導法をすることによって、効果が出なかったことになると、その責任ということは大きいですね。私自身、身が引き締まる思いでやりました。田川市は、市長、教育長、議会、学校現場、一体となって進めていただきました。5月までの間にたったこれだけプリントを使って予習をし、6月から12月の間に1年分の学習を普通の教科書ですが、3倍速から5倍速、つまり1時間で3時間分、5時間分進めるという高速授業を進めていきました。私は9月に行つて模範授業をやらせていただきましたが、ここでも驚くことが起きました。45分間の中で本当に勉強を苦手としていた子ども達が伸びました。その授業をもう一度復習して3日目にテストをしました。6年生対象で単元は何対何という学習ですけど、2時間学習して3時限にテストした結果、子ども達のテストの平均点は94点だった。過去最高の成績が過去最小の時間の授業によって達成された。これは、先生方にとっても私にとっても大きな衝撃でした。これ以降、先生方は、この高効果をさらに進めようということで、今は5倍速から7倍速で授業を進めていると言っています。そうすると、今の働き方改革に関わって、先生も子ども達も時間にゆとりが出てきます。

子ども達はさっさとやってしまうので、宿題を短時間で済ませてしまう。保護者の中には何か不思議だと。勉強しなくなったように見えるけど、成績だけは上がっている。20分30分かかってやっていた宿題をほんの数分でやってしまうため、保護者からはあたかも学習、宿題をやっていないように見えるらしいです。そして、2ヶ月前の2月、1年分の成果を確かめる

ために、東京書籍が出している、全国標準学力テストを実施し、その結果が見ていただいているグラフです。平成29年、平成30年、令和元年、令和2年とやってきましたが、見てのとおりです。各学年とも急激に上昇してきていることがおわかりいただけると思います。私は、漢字の前倒しが有効であることについては、ずいぶん前から知っていましたが、まさか、1年分の算数を予習してしまうことが、これくらい学力向上をもたらすということは予想していませんでした。特に勉強が苦手だとか、嫌いだという子ども達ほど伸びたというのが驚きでした。その後、授業風景をDVDで見ましたが、見ていて楽しかったです。数時間分の授業を一般にやりますので、5、6時間分の授業の最後の問題を最初に持ってきます。これが出来たら今日終わりだからという感じで。そうすると、子ども達は「ウズい」、「無理」、「やだ」とか言ってさんざん好き放題言いますが、終わりになるとみんな出来るようになって、ニコニコしている。たった45分の授業で子ども達が変わるのか、伸びるのかという、驚く風景が広がっていました。

いま、基礎基本の時代なので、計算や漢字だけ出来てもダメだから。と、よく言われます。これ、ものすごく誤解があります。冒頭、山口小学校のデータ見ていただきましたが、応用問題のところはものすごく伸びていますよね。そして、(画面の)これは一昨年になりますが、田川市内のモデル校に取り組んでもらった5年生、6年生がどう伸びたかという、東京書籍のテスト結果ですが、国語の基礎、活用、算数の基礎、活用に分かれています。4年生が5年生になってどれだけ伸びたか、同じ子ども達です。国語の基礎、活用、算数の基礎それぞれすごく伸びています。最も難しいと言われる算数の活用が爆上がりしています。実は応力活用力というのは、基礎基本の完全な定着による基礎基本の活用能力なのです。ですから、基礎と活用自体を分けて考えること自体が落とし穴になって



いるということです。基礎基本を徹底することによって、応用活用力というものが伸びてくる。それが、基礎基本が伸びるよりも、早く応用活用が伸びてくるという驚きの結果でした。

隣に飯塚市というところがありますが、田川市よりも早く取り組んでいました。飯塚市は、地域作りという点からお話したいですが、(画面の)これは、飯塚市の中心校であります、飯塚小学校の記録ですが、見ていただいたとおりです。子ども達の学力が右肩上がり伸びています。飯塚市も田川市も昨年度末の段階で全国平均を下回る学校がなくなりました。それまでは、福岡県というのは博多とか北九州とか筑前であるとか、行政区が分かれています、筑豊地区というのがあって飯塚市が一番大きく、田川市が2番目に大きい。1番2番の学力が爆上がりし、全国平均を超えたため、万年最下位といわれた筑豊地区が今は上位に食い込んできた。福岡県内の関係者の中では話題になっています。基礎力よりも応用力が伸びてきている事が確認できます。

その次に起きていることが重要です。それは、子ども達の問題行動がなくなったということです。これは、子ども達の悩みと関係があります。子ども達に悩みアンケートそして見ると、友達関係、家庭のことがあのように思えますが、どこでとっても一番の悩みは勉強です。ベネッセが取った悩み相談の集計ですが、やはり勉強・学力の悩みというのが一番大きいというのが分かります。勉強の悩みが解消されてきて、自分は出来るという自己肯定感が持てるようになると、無駄な問題行動というものがなくなる。筑豊の飯塚市というところは、問題行動が多く、万引、暴行、家出などこうしたことが頻繁に起きていて、生活指導のために、特別な教職員を別途雇用しなければいけないほどでしたが、この実戦が始まると否や、1、2年のうちにこれらの問題行動は、あっという間に減っていきました。校長先生から、「問題行動どうなったと思いますか？」と聞かれ、即座に、「減ったんでしょ。」

と答えたら、違うんですというので、どうなったのか聞くと、「無くなった。」との回答に衝撃を受けました。

この実戦が始まって、10年が経ちました。その頃に小学生の高学年だった子ども達は、すでに青年になっています。その結果、飯塚市とか筑豊地区の青年犯罪は著しく減ってきて、警察署長さんは暇になったと冗談めかしておっしゃっていたと市長から伺いました。

さらに飯塚市の躍進は進みます。少なくなった子ども達の問題行動のための費用が浮き、オンライン英会話、フィリピンのセブ島とオンラインでつないでマンツーマンで英会話を学習するというものですが、全小学校5年6年生がマンツーマンで英会話の指導受けています。視察してびっくりしましたが、勘のいい子はいるもので、僕はパエリアが好きで、お母さんが外国の料理が好きで、スペインのパエリアを作ってくれたという事を向こうの先生と英語で話している。ICT活用してやっているので、パエリアの写真とかレシピをインターネットから引っ張ってきて先生に解説している風景が見られた。ほんの数年前までは問題行動が多く、私が学校に行くと、チャイムが鳴っても教室に入らなかつた。中には全部の学級が崩壊して校長、教頭が対応に追われて病気になってしまったというところが、数年のうちにこのようになった。そして、こういう話がいろんなところに伝わっていきます。福岡県といえば、孫正義さん。ソフトバンクですね。ソフトバンクとの提携によって、一つの学校に6台から9台のペッパーが配置され、プログラミング教育も単なるプログラミング教育ではなく、ペッパー君を動かすというプログラミングを教育推進しています。これは、どっかのお金持ちの行くことしか出来ない私立学校のお話ではありません。飯塚市は、赤字再建団体になるところまで追い詰められていた、九州の田舎町の今の日常です。

そうなってくると、何が起きてくるのか。当然近隣の子ども達に移り住んで来て、子育て世

代が増え、税収もどんどん増えるようになってきて、町の風景は変わってきました。(画面は)最近の飯塚市の写真ですが、市役所も近代的なものとなり、駅前にはマンションがたくさん建っていくと聞いています。そういう点で地域おこしという点で大成功している。

このようなこともあって、現在20カ所ぐらいに実践が広まって参りました。昨日は岐阜市にお邪魔して、すでに1つやっていたんですが、もう一つ広められないかという話をいただいています。それから大阪市はこの4月から30個やることが決定しました。福岡県においても直方市が加わってきました。続々と実践を導入することとなってきて、私の方は、これらをうまくSNSで統合しながら、実践交流を日常的にやっというと考えています。

では、実践で、何をしたかということですが、それは実は簡単なのです。朝15分間帯授業を取っていただいて、たったこれだけプリント、音読、漢字とかを毎日、全学級でやってもらうということです。これの良いところは、毎日同じ事をやるし、単純ですから、新任の先生がすぐ喜んで、これなら出来るという感じで、新任の先生の方が子ども達の学力を伸ばすということが起きて、新任研修としても使えます。やり方については、(画面で)学校を変える15分という本も出させていただいていますので、参考としていただければと思います。

ここでまとめておきましょう。このような結果が出てきたのは何だったのでしょうか。それはですね、勉強というものに対する根本的な問い返しのもとになっています。集中して勉強して成績を上げよう。おそらく皆さんは何の疑いも持たないと思います。でも、私、気がついたのです。違うと。逆だと。どういうことかということ、勉強するということ自体が集中する練習だと。漢字を10回書くというのは集中する練習ではないですね。だらだらとする練習ですよ。もし、人類というものが、自分の脳を高機能に働かせるために勉強を生み出したとするな

らば、それは、集中というものを、勉強を通じて体得することではなかったのか。そう考えると、子ども達が、だらだら分数の宿題をやっているということは、彼らは分数を学習しているわけではなく、だらだらと学習しているのです。勉強するということは集中する練習であるという風に決めてしまうと、だらだら分数を学習するというのは、勉強が出来なくなる練習と言って良い訳です。こうしたことを考えたときに、勉強ということ集中して行っていく。これを学校でも家庭でもやっという。それが身につけてくれば、わかる、出来るという体験を繰り返す中で、学年を超えた学習というのにもやっようになっていきます。

この3月に岡山県の有漢西小学校というところを参観してきました。ここでも衝撃的な風景が広がっていました。子ども達全員学力が伸びてしまっていて、低学力の子が一人もいません。卒業間際の6年生は、中学校の学習をやっていました。といっても、中学校の内容を小学生で教えることは出来ませんよね。先生が、解説した文章を作って、見せて、それを読みながら子ども達が理解をしてあとは、問題を自分で解いていく自習スタイルでやっています。

その次に2年生の授業を見に行きました。これもぶっ飛びました。2年生と言え、九九が十分定着していれば、OKという段階だったんですけど、それは当たり前で、全員が百ますの足し算、引き算、かけ算が2分を切っていますので、九九の学習というものは完全に終わっている。何をしていたか、割り算をやっていました。そして3年生の秋に学習するあまりのある割り算を自分たちで解いていました。中には2桁掛ける2桁の掛け算の筆算をやっている子もおりました。

また、この学校は、漢字学習については、前倒しの前倒し、つまり3年生の漢字を2年生の間にもう教えてしまっていて、3年生になったら、3年生の漢字の反復学習だけにする体制を取っていますので、3月に行くと3年生の漢字の学習

が一通り終わっていて、まとめのプリントをやっていました。そして、何よりも衝撃だったのが、子ども達がニコニコしながら、先生の援助を受けることなく、プリント5枚、6枚を喜んで取って自分で解いていました。先生は「すごいね、すごいね。」と褒めるだけです。たまに間違っている問題があったら「ここ間違っているんじゃないの？」って言ったら、子どもはすぐに気づいて自分でやり直して解いていました。子ども達は、絶対自分で解くからねっというオーラが出ていました。

ここで、もう一つ重要なことを言っておきます。集中するというのは、一定時間において、どれだけのことをこなすのか。これが集中の度合いです。一方で時間間隔というのがものすごく重要です。ところがどうでしょう。出来るだけ長い時間をかけてやるのが美徳みたいな価値観というのがないでしょうか。違うのです。逆です。勉強時間とか作業は短くなるように工夫をしないと集中って上がってきませんよね。子ども達の状況が悪いからといって、私は心配しているのですが、5時間かけて出来ないものだから、6時間やりましょう、7時間やりましょう、時間が足りません。先生方は帰ることが出来ません。これは非常にまずいですね。そして、この状態を直すことなく働き方改革といって子ども達が出来ないまま先生方が帰って行くということになってしまえば、また保護者は学校批判を始めることになりかねません。この働き方改革というのは、教育内容の転換と一体的に進めなければ、私は不幸なことになると思います。

そして実践のエビデンスを申しておこうと思います。山口県の山陽小野田市というところで文部科学省から予算を取って調べたものです。12の小学校4千人の子ども達を対象として行った研究調査です。(画面で)縦軸学年数と書いていますけど人数と思って下さい。横軸が知能指数です。右へ行くほど知能指数が高い、つまり賢いということです。上に行くほど人数が

多いと言うことです。平成18年に始まったこのプロジェクト、ピンクの線ですね。ちょうど突き出た102のところは平均値でした。4千人の子ども達が5月段階では102だということです。そしてその年度の終わり2月に再度知能検査を行い、黒い線の方に、右へ動いていることがおわかりになると思います。つまり、子ども達がこんな風に知能指数が上がったということです。平均値は111です。9ヶ月間で9ポイント上がっていたのです。塾の世界ではよく言われる事ですが、知能指数÷2が学力偏差値だ。知能指数が9ポイント上がったということは、算数の成績はその半分4.5ポイント偏差値が上がっているということです。その下のグラフ見て下さい。きっちりとピンクの線、黒の線が上がっていますよね。4.5ポイント上がっていたのです。

そして、この知能指数のグラフには、もう一つ、大きな深い意味があります。ピンクの線と黒の線、多少崩れつつも、左から右へ動いているのが分かると思います。そうです。これは全ての子ども達が均一に伸びているということを意味しています。ということは、最近よく話題にされる学習障害だとか発達障害だとか、こういう子ども達も伸びているということを示しています。先ほどの漢字ストの結果思い出すと、まさしくそうです。飯塚市、田川市やっていますが、文部科学省の話によれば、どのような学級にも6%程度障害を持った子ども達がいる。指導方法には注意しましょう。ということを言われています。私も市内一斉に、百ますだとか漢字学習というものをやることになりましたので、6%の子ども達がついて来られなくなったときに、どうしようと心配していたけれど、意外な結果です。そういう子ども達もひっくり返って伸びてきてしまっている。

札幌市に、学習障害の子ども達のみを扱う福祉施設があります。放課後デイサービスですけど、その子ども達は、大体小学校中学年から中学生までそこで指導受けるのですが、数年指

導を受けているうちに、普通高校のそれも上位の高校に合格するようになってきたという報告を聞いています。中には、その地域のトップの私立高校にも合格して、障害者手帳を返納した事例も出てきました。私たちが思っている以上に、子ども達の学習のやり方、トレーニングの仕方によってそうした困難というのは克服することが出来る。子ども達が自分で出来るようになれば、自由を獲得することになる。そういう点で、すごく素晴らしい結果を生んでいるなど感じています。

では、具体的にどんなことをやっていけば良いかお話しします。まず百ます計算ですが、2分以内に出来るようにして下さい。重要なのは、1年生、2年生です。1、2年生で2分以内はハードル高いですが、これを出来るようにトレーニングして貰おう。高学年になったら違うものがあるのですが。

それから2つめ。全漢字プリントなどを活用してもらって漢字の正解を9割に持って行く。それから音読。これは、古文、漢文を学校の方で整理して1ヶ月に一文で良いです。これを暗唱させると良いです。このときに、小学校1年生に枕草子やらせるのかという事になる訳ですけど、やらせます。やってみて下さい。驚くことが起こります。何が起きるかという、低学年の子ほど、早く覚えます。低学年の子は音から学習していくのです。ところが4年生以上の子になってくると、これどういう意味になるのだろうと、つい理由を考えてしまうのです。そうすると、すっと入ってこないです。高学年になってくると意味の学習がすごく重要になってきます。これ逆説ですけど、低学年のうちに意味が分からないからこそどんどんあとから役に立つ文章を音読暗唱させていけば良いと言うことになります。

江戸時代の寺子屋の文化というのは、それほどきちんと考えられた学習だということが分かってきました。

あと、これだけプリント、予習教材とかを使

って、完全に覚えてしまえば、授業を高速化できるということを、今、多くの学校でやっています。それをやっていくために重要なことをついでに申し上げておきます。

まず、重要なのは、今申し上げた事というのは、なんか夢みたいな話にしか聞こえないと思います。私が、数年前に今の話を聞いたら、え？と自分で驚くと思います。それほどに常識は覆る。子ども達の新たな可能性、学習の方法が見えてきています。だから、先生方自身が先進的な学校や学級の視察を行っていただく事がすごく大事です。ただ、青森県むつ市の近くにモデル校がないので、昔鶴田町がやっていたので、今でもやっているかもしれませんが、近いところでは、岩手県一関市、福島県桑折町、山形県長井市とかやられていますので、そういうところに行かれるのも良いでしょうし、今はこういうご時世で、こういう講演も出来ますから、Zoomを使って視察をするのも良いかと思います。

そしてもう一つ重要なのは、この授業の様子を校長先生中心として、管理の先生方で指導していただく事です。最近、残念ながら校長になりたくない先生ばかりになってしまいました。その結果、校長職という重要性が軽視されてしまった。飯塚市、田川市、何十校と指導していたのですが、いち早く成果が出て来るところとぼちぼちというところに分かれるのですが、その分かれ目は1点です。校長先生の指導力なのです。パチッとみんなが一斉にやっていただくすごく良いです。

逆にショックと思うかもしれませんが、保護者や地域の方々が良い先生に習いたいと思っている。そろそろそれも止めた方が良いと思います。恐ろしいこと言いますが、良い先生にあたって1年やってもらったら、すごく伸びますよ。でも翌年1年でその効果は消えます。私もショックでした。低学年で百ます計算できれば、中学年で掛け算の筆算、結果なのです。高学年の約分が簡単にできます。つまり、6年間を通

して組織として指導するというのが一番重要なことです。俺、教師としていけているみたいなスタンドプレーに走る先生がいて、応援してしまうと、その1年は良いかもしれないが翌年に指導の継続が難しくなり、6年間で見たときに何やっているのか分からないということが起きます。だから校長先生が中心となってコーディネートしていただきたい。田川市、飯塚市の教育委員会の方々は、このことをよく分かっていて、新任の育成、中堅の育成そして管理職の配置が見事にマネジメントされています。結果的には、先生方もその方が楽なのです。朝15分使って、読みましょう、書きましょう、覚えましょうだけなので、新任の先生でも出来ますから。あと、基礎力が出来てくれば、学校の通常の授業は楽になります。

最後に決定的なことがもう一つあります。漢字や計算の結果を数値化して公開するという事です。これをやろうとすると、うちの学級は出来ていないとかで結果を隠そうとします。そうすると全体的に伸びていくということが難しくなります。

これには笑い話があるのですが、山口小学校に実践をやり始めた最初の年、漢字の指導が、ものすごく得意な先生と漢字の指導が最も苦手な先生が学年で組を作っていて、そこで全校一斉に漢字やりましょうということで。数値化して、それぞれの学年の漢字がどれ位定着しているか。得意な先生と苦手な先生の結果がセットとなって見えるから恐ろしいですね。ところが結果出てみて、みんなびっくりしました。何が起きたかという、ピタっと同じ点でした。何をしたかという、得意な先生が作ったプリントを苦手な先生がもらって一緒にやっていたのです。

ここでも重要なことがあります。授業は大事。でも、もっと大事なことがあります。それは何か。教材です。さっき述べたとおり、漢字は私のドリル使って下さいね。やり方は教材と一体ですよ。こういうことなのです。ですから教材

を作り、子ども達にやらせる。授業というのは、子ども達が教材に取り組むのをコーディネートすることです。子ども達が直接格闘しているのは教材なのです。教材が良いものでないとどんなに授業改善を行っても子どもは伸びません。そのことに気づいた田川市は、私の教材だけでは飽き足らないとあって、若い先生方は新しい教材をどんどん作って行って、子ども達の学力を上げるということに喜びを感じるようになってきています。

そしてご家庭の方にお願ひがあります。家庭での生活週間です。一つ目は食習慣です。(画面で)ここにありますグラフは、1回の食事使われている食材の種類と成績との相関関係です。いろんな食材を食べさせると、学力は上がる。食材を少なくすると成績は伸び悩む。青森県というのは海のもの、山のものもあります。雄大な自然がありますから、その自然の恵みを活かした食事を提供してもらおう。地産地消というところでは都会よりも郡部の方が有利ですから、是非ともやっていただきたいです。

(画面で)このグラフですね、30年前ものですが、私が子ども達の学習をやろうと思ってやったものですが、そんな家庭生活まで口出すのかと言われ、苦い思い出がありました。次の年も同じ子どもを持ち、学級懇談会の前日に書店で食事と学習との相関関係について探したのがこのグラフです。これを配って懇談会に臨みましたが、なにも手応えはありませんでした。そんなもんで成績変わらないでしょ。となったのです。その翌日不思議な現象があり、子ども達が昨日の食事が豪華になっていたという話をしており、これを機会に各家庭の食事の内容が一気に良くなっていきました。その後、この山口小学校というところは、NHKのクローズアップ現代という番組で放送され、その中で私も出演して知られるようになったのです。NHKの調査の中でも分かったことに、他地域の比べ山口小学校の朝食というものは、ご飯と味噌汁に2皿が標準になっていた。それまでパン食だ

ったものが、NHKで放送される頃には、ほとんどご飯食に変わっていました。ご飯食の方が腹持ちは良いですね。とりわけ朝ご飯重要です。最近では16時間のプチ断食しましょうみたいな事もあります。大人と子どもは分けて考えて下さい。子どもは朝ご飯絶対いります。なぜかという、朝1時間目から4時間目のところは重要な学習となってきます。

朝ご飯食べていない話を聞くと、午後からの仕事中心だったりとか、ミュージシャンみたいな方はみんなが寝静まってから仕事本番迎えるので、夜食が一番豪華だったりとか、一番大事な作業の前にはしっかりと食事を摂るというのが原則としてあると思います。

全国的な調査でも、朝御飯を抜くと学力は下がります。朝食を全く摂らないということは、百ます計算を頑張ったとしてもなかなか成果を上げるのは難しいかもしれません。そのところはご家庭の方でもご努力をいただきたい。そして、早寝早起きです。(画面で)ここにあります上のものは、ずいぶん古いですが、東京都の子どもの就寝時刻の変化です。1979年と2002年とちょっと古いですが、小学校4年生左端見て下さい。ほとんどが79年は青。つまり晩の10時までは寝ていました。そこから10数年経ったところでは、半分近くまで減ってしまって、赤い部分、晩の12時よりも遅くまで起きる子ども達が出てきた。1979年にはまだ10時までに寝ている受験生は東京にいたのですが、10数年経って全くいなくなって、12時より遅くまで起きる子が多数派になっています。そのことが子ども達の学習にどのような影響を与えたか。(画面で)それがこの表です。広島県が実施しています学力テストの結果を睡眠時間との関係で調べたものですが、睡眠時間短いと成績は低いです。睡眠時間が増えるほど成績は上がって行って、7時間から9時間だと大体安定してきます。また、それ以上寝てしまうと寝過ぎでまた悪くなるということで、適切な睡眠時間があるということを示していま

す。

では、何時に寝れば良いのか。そのことが分かるデータがこれです。(画面で)調べてもらいました。意外でした。8時から9時までに寝るのが一番よく、寝るのが遅くなる毎に成績が落ちていきます。12時まで遅く起きている子ども達というのは、知能指数から見てもかなり厳しい状況になってきています。勉強が集中する練習だと考えたときに、睡眠や食事という基本的な生活習慣とは非常に重要という事を意味しています。

そしてテレビです。今ではスマホとかYouTubeとかSNSがあると思いますが、1時間程度であればそれほど影響は及ぼしません。全面禁止みたいなことは必要ありません。ただし、2時間を超えてきますと影響は出てきます。テレビやインターネットが悪いというよりは、そのことによって睡眠時間が削られていくということが、学力を低下させてしまいます。

昔テレビ、いまスマホということがだんだん分かってきて、ほどほどにしておかないといけません。

最後に、学習方法の改善が求められていることですが、この4月から中学校の教科書が全面改定されたことをご存じでしょうか。特に注目したいのは英語です。なぜかという、小学校英語をやったことを前提として中学校の教科書が編集されているからです。かつて、ゆとり教育といわれていた時代に3年間で学習すべき英単語は900でした。この3月までは1200語でした。この4月からは中学校では1600～1800語ということで、ここだけで、ゆとり時代のほぼ2倍の単語数の学習になっています。それとは別に600～700の英単語を小学校で学習することになっています。中1の英語の教科書は小学校の間に600～700の英単語を学習しているものとして編成されています。中学校3年生の英語の教科書は、私たちが高校時代に習った内容のいくつかが中3に降りてきています。ですから、小学校英語の試行が

始まるときに、中学校に行って苦手にならないように、みたいなことを言われて、あまり書かせることなしで行くような風と言われていたが、実際にふたを開けると4技能あると、非常に高いレベルが中学校の段階から要求され、そして、検定試験等は大学入試にリンクすることになっています。これは非常に大きな問題です。実際600～700の英単語、全国歩いてみましたけれど、きちんと習得できている学校は聞いたことがありません。しかし、中学校1年生では前提となってきています。ですから、ますます子ども達は厳しくなっていきます。

平成25年から小学校における暴力行為というのは高校の3倍に増えてきていますし、中学や高校は近年安定してきているが、再び増えてきています。当然これらはいじめ問題とリンクしています。こうしている間にも北海道では中学生が志望したということで大きな話題になってきています。もう一度、学校の取り組みとはなんぞやということが、働き方改革とは別の角度から出てきたのではないかと心配しています。

もう一つが不登校です。この不登校も近年急速に増えてきて、しかも、これが加速度をつけて上がってきています。先ほどのグラフで平成25年から暴力化現象が見えてきていますが、この不登校も平成25年度を境に増えてきています。その時期から潮目が変わったのかなという気がします。よく暴力問題というのは、基準が変わったから増えたと解釈されますが、不登校の場合は1ヶ月以上学校に来ないという客観的な基準があります。これが平成25年から増えているということは、やばいです。なんか起きています。

先ほど見ていただいた、飯塚市の実践は平成24年から始まっていて、これとは全く逆です。不登校も減り、子ども達の問題行動は激減しています。ですから、この問題が顕在化するまでに、多くの地域でこれに取り組んでいただいて、パニック的な学力問題が起きる前に、きちんと方向性を指し示していくことが大事だと考えて

います。

本当は今年行われる予定だったのですが、国際学力調査PISA2021です。来年2022になりますけれど、過去2回落としてしています。小中学校でこういう状態になっている中で、高校1年生でPISAテスト受けるのですが、どうでしょう、上がりますかね？次落ちると、史上最悪になります。そういう点からも、今年度からの学校教育というものは非常に厳しい正念場を迎えていると考えています。

それに対して、私の方で展開しているのは、希望の星はGIGAスクールです。このGIGAスクールで、子ども達全員にタブレット渡すことによって、子ども達の学習を全面的に21世紀型に切り替えることが出来ます。私も、タブレット教材ということで、K-GYM(ケイジム)というタブレット教材を作りました。これは冒頭に申し上げた田川市の昨年度の学力の爆上げを達成した、たったこれだけプリントを、タブレットPCの中に入れ、紙の本よりももっと高速に学習できるシステムとして提供を始めました。これを金川小学校の方に持って行くと、「ヤッター。これでプリントの印刷の量が減る。」と、驚いていたのです。爆上げした田川市の金川小学校は1回に3000枚とか5000枚とかプリントするらしいです。その手間が半分、3分の1以下に減らせると思います。21年度は無料で提供していきます。いまは、たったこれだけプリントだけですが、これに算数ドリル、それから先ほどから気になっています、英語は12月に搭載をしていきます。漢字については、指で書いて学習していく指書き漢字を搭載していきます。百ます計算はもう書かせません。テンキーで学習していきます。小学校の低学年から楽に始めさせることが出来ます。プログラミングについても算数問題を作るというちょっと変わったシステムですけど、マニアックな算数プログラミングも入れております。つまり4教科と英語、プログラミングの全部を網羅する形で、来年春のリリースを目指して作っ

ています。現在は、この活用の方法を知っていただくとなっておりますので、この1年間無料となっておりますので、もしよろしければ、むつ市におかれましても1校でも全校でも構いませんので、ご要望いただければサポートさせていただきますと思っています。

いろいろ申しあげました。えっ！えっ？えっ、そうなの、という驚きの連続のお話になったかもしれませんが、大丈夫です。しっかりと事実、エビデンスに基づいて提案をさせていただいております。子ども達が健やかで、学力向上と成長を願ひまして、また、皆さんと共に進めたらと思っています。

私の話はこれで終わります。どうもありがとうございました。

【休憩】

### 3. ディスカッション

**事務局：** それでは、ディスカッションに入ります。

このあとの進行は、むつ市総合教育会議議長であります宮下宗一郎むつ市長にお願いしたいと存じます。

宮下市長お願いします。

**宮下市長：** 皆さんよろしくお願ひいたします。ディスカッションで、今私たちが思っていること陰山先生にお聞きしてみたいと思います。私、今日聞いてみて、スゴク率直な感想を言ってみるとラッキーかなと。こういうお話と聞けて自分自身個人的にも勉強になりましたし、地域としても勉強になった時間だと。その中でも、先生おっしゃっていたのですが、成績が伸びないからといって、努力が足りないと考えて、ただ一生懸命やらせるだけだということではなくて、やり方を変えると。そういうことで、正に今、日本政府に言ってやりたいですね。コロナの対応です。そういう風な気持ちになるお話だった

と。普遍性のあるお話だったと。個別性の話で行くと、学力の向上や地域全体に与える影響まで研究されていて、漢字というところから入って、頭の回転が高まって、自己肯定感がついてきて、各教科も出来るようになり、そのことが子ども達の向上を変えて、地域を変えていく。ということは、素晴らしい成果だと思いつつ同時に、今私たちが目指している学力の向上が地域を変えるという方向性が、エビデンスを含めて実証されていることが心強く思った次第です。

今日は、教育長始め、教育委員の皆さんにも出席していただいておりますので、それぞれの感想というのを含めて、陰山先生ともんでいきたい。

まず、はじめに教育長から先生のお話を伺った印象というか感想をいただきたい。

**阿部教育長：** 率直な感想ですが、まず理論ではなく、実践を聞くことが出来たと感じています。本当に得がたい機会を得てきて良かったと考えています。そして、あと一言だけ申し上げるとすれば、地区の子ども達は力があります。本当に一生懸命頑張っています。先生方も身を粉にして指導に当たっています。なので、もっともっと伸びる可能性があるかと心から思っています。皆様でその方向を探していく。そして実践していく。それをこれから考えていきたいと思いながらお話を伺っていました。

**宮下市長：** それでは順次教育委員の皆様からの意見、それから先生の意見ということで進めます。まずは、田中委員からお願いします。

**田中委員：** 今日は大変貴重なご講演ありがとうございました。私の方からですが、先ほどの市長の挨拶で、子ども達の競争力の問題、地域が閉鎖された世界での競争力の問題が述べられていましたが、それは非常に感じるどころでありまして、なかなか子ども達は大きな目標を持って



上の段階に行くというよりは、むしろ限られた中であまり競争することなくいろいろな学習とかをしているなと思いました。

それで、百ます計算とか漢字は、競争力を高めるには有効な手段だということを感じました。ただ、いろいろと地域の中で、達成できなかった子どもに対するケアも必要ではないのかな。また、授業の高速化を進めるということで、先生方の対応もいろいろと努力をしていただかなければ実現しないのかなと思っていました。あと、家庭環境ですが、私、歯科医師をやっておりますので、学校を訪問して健歯する際に、口の中の環境は個人差があります。多分、虫歯の多いお子さんというのは家庭環境もなかなか、食生活に対しても十分ではないのではないかと思いますので、そういうことに対しては地域を挙げて皆さんで取り組んでいったほうが良いのではないかと。

**宮下市長：** 陰山先生。今のお話伺っていかがでしたか。

**陰山氏：** 競争ということはありますけれども、私自身は競争というのは、ある場面みたいな物だと思います。最も重要なのは、目当て、目標だろうと思います。目当て、目標を、適切に子ども達に持ってもらうようにする大人の構えというものがものすごく大きいと思っています。

先ほど山口小学校というところを言いましたけれども、実は一点言っていなかったことがあります。非常に開明的なところでもあります。田舎でありながら。というのは、生野銀山があつて、江戸時代からの天領であつたんです。つまり、山口小学校の校区は江戸幕府の役人が江戸からやってきてその地域を統括していました。そして明治から昭和50年代までは三菱が管理をしていましたので、東京の三菱金属の直轄下にあつた訳です。ですから、中央に対する意識というものが近い。割とこう幕末から昭和にかけて東京あたりに出て行って仕事をするとい

うことが、何人もいたというところがひとつあります。

生野銀山の閉山が昭和50年代にあつて、約10数年間本当に地域の教育と地域性が没落していく中で危機感があつて、何とかしないといけないというところから始まった訳です。

それを受けてその当時僕が教えた子ども達というのは、大学教授やっていると、ノーベル賞をもらうような研究をやるかという子ども達もいますし、あと、全員が伸びているので、地元に残っている子ども達も有能です。ですから、非常に地域自体が活性化していますし、それから、医学部に行って地元に戻ってきて地元の医療に貢献している子ども達もいます。つまり、全ての子ども達を伸ばすことによって、単に自分の学習を自分だけのものとせず、地域や人類社会全体まで高めようという意識がすごくあります。ですから、競争というのは、あの子に負けないぞというのは、別に大人達がさせようとしなくても、子ども達が自分たちでライバル決めて勝手にやっていくものですよ。あれをやらせようとかやらせてはいけないとか、大人が関わるからおかしな事になるので、競争は勝手にやらせておけば良いです。ただし、将来をどう見据えるかは、はっきりいって大人の仕事。

直に言っちゃうと、むつ市の未来を今の皆さんがどう考えるかということと、教育というものが連動していなければ、やっぱりその程度のものに落ちていってしまう危険性は感じています。

いま、いろんな地域で学力向上の方法として広まって来ていますが、関係のところでは今課題だと思っているのは、何のために学習するのかということを地域で共有する、大人達が共有することの重要性。それを今一番感じています。

**宮下市長：** 先生ありがとうございました。

むつ市の未来と教育の連動というのは、これ一つの大きなテーマだと思いますので、私たち、また、この問題について議論を深めて

いきたいと思えます。

続きまして、黒木委員にお願いします。

**黒木委員：** 黒木と申します。

どうも、貴重なお話ありがとうございました。

いくつか、質問とか感想を述べさせて頂こうと思えます。

最初の感想は、すぐにやるべきじゃないかと思いました。

私は市内で、中学生とか高校生に勉強を教えるようなことをちょろちょろやっているのですが、静摩擦と動摩擦じゃないけれど、先ほどの競争の話でいくと、1回動く子ども、自分もそうですけど、勝手に動きます。最初動かすことにすごいエネルギーは要りますけど、そのあとはもう、動摩擦始まっちゃったら、ようは漢字、人より抜きん出て出来た、計算、人より抜きん出て出来たら、理科も社会も英語もやるようになるというのは、まあ、ほとんど自明と言って良いですね。陰山先生のおっしゃっていることは、いちいちもつとで、反対すべき点がほとんど見当たらなかったのが、コストの問題だけかなという風に思えます。

自分もその通りだと思って、実際やろうとしているのは、先へ先へと進むというのは重要だと思っていて、ようは1年先に進むとヒイヒイ言いながら、その時は難しいと思っていたのに、1年前のことは見ると、あれ、簡単だったって分かることはしょっちゅうあります。俗にゴルフの話になりますけど、ゴルフのコーチについて、打ち方について、一生懸命あーだこーだって習うんですけど、全く分からないんです。で、妙な話、打ち方が出来るようになると、あーあの時コーチが言っていたのはこれだったのかって分かる。ということが、学校の勉強だけでなく、人生において頻繁に起きます。社会人なってからも起きます。ということを知っているんで、やっぱりできる限り先へ先へ進むというのが、私は重要だと思っています。例えば、小学校の授業、カリキュラム6年分ありますけ

れど、先ほど5倍速、5倍速は盛り過ぎかなと思っていますが、例えば3年で終わらせるというのは、結構、お子さんが大天才でなくても可能じゃないかなって思います。ようは、今の進み方で教えられているから、その進み方で、それ以上やらないっていう子どもがいっぱいいるというだけで、もしも、6年分を3年で終わらせようとみんなで動き出したら、それについて来られる子どもは、7割を超えるだろうかと、自分の感で観測しています。だから、それ可能ならばやればいいんじゃないかなと思います。

まあ、文部科学省の指導要領というものがあって、それをどのくらい無視していいのかという話になってきまして、まあ、無視すればいいんじゃないのと思っていますけど、そうも行かないので、6年分を3年で終えるということが、もしも、高校教育で可能なのであれば、それをやるべきでないのかと常日頃から思っています。

質問ですが、コストの話と、もう一つは、プラン、ドュー、シーみたいなことをやらなければいけないと先ほどおっしゃっていましたが、システムとして取り組んで、管理者がきちんとアドミニストレーションしなければ、うまく回らないよってという話がありましたけれど、先生のお弟子さんていうか、ファシリテーターみたいな方が下にいらっしゃったり、派遣できるような人がいるとか、そういうことはないのでしょうか。

質問としては、コスト、それから、派遣できるファシリテーターみたいなチューターをお持ちでないか、その2点が質問事項です。

**陰山氏：** お答えしてよろしいですか。

**宮下市長：** 先生お願いします。

**陰山氏：** コストという点でいうと、格安です。(笑い)ドリルはですね、今、子ども達が使っているものを私のものに変えていただくとか、それから今猶予している「K-GYM(ケージム)」

というコンピュータシステムは、まあおそらくどんなに高くても一人1年間で、3千円かかるかかからないか位かと思えます。

コスト面でいうと、僕らから見ても驚くほど安いです。というか、安くやらないと意味がないです。要するに家庭環境貧しいから学力が低いまままだみたいなことを文科省が言っており、こんちくしょうと思っているので、それは絶対あり得ないということがあります。

それから派遣できる人間というのは、いなくはありませんけれど、実は、5月の末ぐらいからSNSを用意して、それぞれの関係のところを全部情報交換を行うシステムを作ります。フェイスブックを使おうと思っていますので、動画等の共有も行う事によって、かなりリアルタイムで、いろんな情報交換が出来ると思えます。

それから、先ほどちょっと言いましたけれど、青森はちょっと遠いですが、山形、福島、岩手、新潟それぞれちょっとずつやっているとありますので、それらがブロック毎に研修をしていただくということをすれば、これも急速に進むのではないかなと思っています。

掲示の数値ですが、一つは指導要領の問題なのですが、おっしゃるとおりです。自分の事務所の方で、実験をかねて塾をやっていますが、1週間に1回1時間の授業でだいたい1年から入ってきた子達というのは4年生で6年分は終わります。僕もショックを受けるくらいに早くすすむので驚いています。中にはおばあちゃんが、授業全然ついて行けなくてという風に2年で入ってきた子が2年間で学級の超トップに立ってしまって、もう、周りの子が馬鹿に見えてきたから、私は中学受験すると言って、進学塾に移ったという、信じられないことが起きていて、どうも、勉強の仕方を変えることによってこれくらい変わるということが見えてきています。

もう一つ、指導要領を破ることについては、宮崎県延岡市が市内一斉に行っておられ、現在、内閣府のスーパーシティ構想へ応募されていて、

この構想でこの指導要領をはずということを提案されています。これが通れば学年を超えた学習というものをどんどん進めて行くことになるかと思っています。私自身が中学校3年生の段階でこのペースで行ったあと、高校の大学入試のところ一通り終わり、高校に入ると大学入試の模擬試験を受けることが出来て、あと何点足りないのか見えてくるので、高校3年間の学習目標がはっきりする。予習するということが、学校を無視するというのではなく、追い越して学習することによって、先生に教えてもらうことが輪郭を持ってはっきりしてくる。このことを俯瞰的理解と呼んでいますけれど、学習する全体像が見えてくると、細かいところで何をしたら良いか、逆にくっきりしてきます。

今年日比谷高校が、開成高校を追い抜くために、高校3年生の学習内容を自主学習と称して2年生からやらせということが話題になっています。それは指導要領破りになるのですが、子ども達が勝手にすすむということを学校がサポートするのであれば、指導要領上問題はありませぬ。いよいよ来たかなという感じはしていますので、黒木さんの御提言はまさしく今の今にあった提案だと思いました。以上です。

**黒木委員：** ありがとうございます。

戦前、飛び級という制度があって、勉強の出来ることは飛び級していたと思うんですけど、自分の経験では、小学生の時のことを思い出すと、勉強出来ないことに2種類ありまして、授業について行けないタイプと、授業が退屈だというタイプと思います。退屈だと授業に集中しないので、集中しないと出来なくなってしまう。なので、おもしろくするというのは、スピードが速いとおもしろいはずなので。今のカリキュラムを文部科学省がどのように作っているか判りませんが、小学生の子がうちに帰ってお手伝いをしないとイケない、弟妹等の面倒を見なきゃいけないという中でカリキュラムの様に見えてしょうがなく、現実に全対応してい

ないので、普通にやれば3年で終わる気がするんです。なので、文部科学省にどれだけ逆らうのかという話になるのでしょうかけれど、結局スピードを上げるということは、子ども達の退屈さを薄める、エキサイティングな授業をすることになるの。そうすべきじゃないかと思いません。

ありがとうございます。

**宮下市長：** 私も黒木委員が言ったことで、思うことがあって、先取りとか習熟度別とかという話は、むつ市の教育環境の中では、一番クールな感じがするんですよ。ただ、一方で知り合いの小学生とか中学生とか子ども達の話の聞くと、例えば、プリント一枚宿題でもって帰るときでも、「ここから先はやらなくていいよ。」という指示が出ていたりする。あるいは、「やってないところはやらなくていいよ。」という指示が出ていたり、子ども達は親のいうことを聞かないけれども、学校と先生のいうことを聞くので、やらないですよ。そこで止まってしまうことがすごくあって、そこに違和感があります。全体として、指導要領どうしていくかという話は、これは地域で話し合っていかなければならない課題だと思います。それはそれで、文部科学省で、やらなければならない部分があるんですが、ちょっとした伸びしろを踏みにじることもあるんじゃないかと思うのですが。

陰山先生どうでしょうか。

**陰山氏：** おっしゃるとおりで、集中するとかスピードアップするとかは、子ども達にとって喜びなんです。ところが出来ない子はゆっくり教えてあげないといけないという、根拠なくそういう風な話になってしまって、出来ない子に合わせ、ゆっくりで良いよ、というものだから、みんなが出来なくなってしまう。みんながおもしろくなるのが、現実起きてしまっている。

だから、はっきり言って、ゆっくり丁寧な指導は最悪なんですよ。ゆっくりで集中しないし、

丁寧で受け身にすることなんです。余り大きな声で言えませんが、私は雑で早くやっていたんです。そうすると子どもは出来るようになるんです。そこで何が起きるといって、子どもが勉強を好きになるんですよ。子どもが親に合わせて言っているのかと思ったら、特に最近の子どもは勉強好きになりますね。全部自分で進めて行くんです。そういう風景をいろんな学校で見えていますので、私たち自身、勉強と子どもの関係を根本から見直す必要を感じています。ですから、市長さんがおっしゃっていることは、そのとおりだと思います。

**宮下市長：** ありがとうございます。

長岡委員お願いします。

**長岡委員：** 今日の、陰山先生のお話ですね、個人的にも親としても、また、地方都市に生きる者としても、もっと早くお聞きして、実践しておけば良かったなと思うばかりです。

私の個人的な問題意識として、地方都市において、非認知能力を高めるということを課題として持っております。非認知能力を高めることが認知能力を高める関係にあることを様々なところで見聞きしております。自然に触れるとか、地域の大人達と色々なことで関係を結ぶとか、そういうことが認知能力、学力を高めることにつながればいいと思うんです。今日お話しいただいたことは、どこも地方都市ばかりでしたので、やり方によっては、学力、認知能力が伸びていくのは大変心強い思いがしたんですけど、地方において、認知能力を高めることにおいて、様々な利点があればいいなと思うんですけど、陰山先生がお考えの地方ならではの利点というのはどのようなところにあるのかお聞きしたいと思います。

**陰山氏：** 子ども達が本当の意味で創造性を高めていくのは、絶対地方の方が向いていると思います。それはなぜかといくと、理系のノーベル賞

受賞者の多くは地方出身者なんです。ああいう方の話を聞いていると、幼少期の自然体験とか極めて地方から出てきている。私、前原巧山という人間がすごく好きで、絶対社会科の教科書に載せたいです。何をしたかという、日本で初めて蒸気船を走らせた人です。宇和島藩のただの職人で、ペリーが来て4、5年後に藩主に命じられ、無理矢理作らされて、ところが自分が長崎まで蒸気船を見に行き、帰ってきて自分で研究して作っているんです。見たこともなく、理屈も知らないですけど、1年後に自分で設計して作ってしまっているんです。脳というのはそれくらい高いポテンシャルを元々持っている訳なので、ものすごい勉強をあらかじめさせようとする必要があると、私は思わないです。子ども達に、のびのびやらせているのは、まさにそのとおりで、ただし、基礎学力とか脳の働きを自分で十分高めるというトレーニング、いわば寺子屋ですね、これが一番重要で、これからの時代、もう一回変化が起こることですけど、文明開化の時よりましでしょ。文明開化が何で達成できたかという、寺子屋があったからです。脳みそをとことん高めれば、全部一緒だろうと。そういう点では、地方都市の方が必要にいと。都市部の方でもそういうことは知っていただかなければならないので、東京都内の教育委員会に働きかけて、なんとかこれやってくれないかなと働きかけしているところです。

**長岡委員：** ありがとうございます。  
大変力をいただきました。

**宮下市長：** ありがとうございます。  
次、納谷委員お願いいたします。

**納谷委員：** 素晴らしい講演、聴かせていただいて大変ありがとうございました。  
私は、中学生の子どもを持つ保護者であり、目からウロコと言いますか、反省しきりでお話

を聞かせていただいたんですけど、昨日も娘に、まだ30分しかまだやっていないの？とか、英単語覚えなさいとか、そういうことばかりを子どもに押しつけてきたのかな、という風に反省しながらお話を聞かせていただきました。お話の中で、小学校6年間で一貫して同じスタンスで教育していくことがすごく大切だという風におっしゃっていたと思いますが、公立の小学校、中学校の場合、やはり校長先生もそうですけれど、先生方の転任というか、異動していきますので、一貫して同じ先生方で6年間続けていくことが出来ません。それを実現するためには、教育委員会ももちろんですし、地域、あと全体、教育に携わる人たち全体の共通の認識というのがすごく大切なんだという風に思いました。

下北管内で、大規模校と小規模校がすごくありまして、大規模校だと、たくさんの先生がいて、一つの教科に対して専任の先生で教科を教えていけるんですけど、小規模校だと、一人の先生が全てをまかなってやっていく形になっていくので、どうしても大規模校と小規模校の教育の差というものが出てくるというのが実感してまして、共通の教材を使うことによって、むつ下北管内の子ども達が、同じような傾向が出るというのが興味を持ちましたので、是非、すぐやっていただきたいと。むつ市でもやっていくべきだと思いました。ありがとうございました。

**宮下市長：** ありがとうございました。  
教育長お願いします。

**阿部教育長：** 3点お話ししたいと思います。  
我々学校の教員が何を目的にしているか。それは子ども達の可能性を最大限保障する。この1点につきます。  
私は、中学校の教員として、よく高等学校に足を運んだのですが、ある時、こういう指導をしている場面に遇いました。高校の教師が子ど

も達に、「みんな、あと何年か、何ヶ月かすればたった一人の全国大会に臨むことになる。」

意図は、資格試験であれ、入学、入社試験であれ、自分と同年代の見たこともない、日本中の人間と夢を叶えることが出来る、そういう場面に移るんだよ。だから、がんばろうね。それを聞いていて、そうだな。自分は中学校だから、子ども達が何年かすればそういう場面に向き合うことになる。そのときに子ども達がどんな道を選ぶにせよ、可能性を捨てることなく、自分の意思で決められるように。そういうことを、特に中学校は義務教育最後ですので、社会的自立の一つとして責任を負わねばならないのかなと思いました。

今日の御講演を聴いていまして、ご発言にはなかったんですが、著書の中にこういう一節がありまして、「みんなで勉強するから判って楽しい。」そういう表現がありました。私は、学校は集団活動の中で、個を育てる。そんな場であると考えています。従って、そうだよな。と、頷きながら読ませていただいて、協力というのは、みんなが同じことをすることではありません。同じく著書の中で、「授業の中で、待ちの時間を作ってはいけない。」という記述がありました。先ほど、黒木委員のお話にもありましたけれど、判ってしまって、待っているのであれば、誰のための時間でもないと思います。もし、そういう子どもがいるのであれば、「ちょっと教えてご覧よ。」リトルティーチャーとして使っていく。あるいは、先ほどお話しがあったように、「これやらなくていいよ。」というプリントがあるならば、「挑戦してご覧。」そういうふうな時間にすることが出来るかもしれない。そういう工夫によって、みんなが勉強するから、判って楽しい。これが全ての児童・生徒に保障できる学校を目指していかなければならないと感じました。

同じくお話の中にありましたけれど、昔は、学習指導要領は上限でしたので、1ミリも踏み越えてはいけない。そこに書かれていないもの

を教えるてはいけない。そういう扱いでした。今は、違います。今は、下限になっていますので、書かれていないことを学ぶことに制限はありません。唯一の制限は、児童・生徒の負担過剰とにならない、だけです。もちろん学年を超えること等に関しては一定の制限はありますが、学習指導要領の研究開発という制度があります。文科省で申請を受けてくれれば、それを踏み越えた特別なカリキュラムを組むなどは可能です。いろんな知恵を絞りながら子ども達の力を育てていかなければならないのかな。と、御講演を聴きながら、そしてご本を思い出しながら考えていました。その工夫の一つとして、例えば、自学予習についてお話になりましたけれど、そして、行動に制限なく出来る。そんな風に思って、自分の経験と照らし合わせて聞いていました。中学校の教員ですので、入試があります。どうしよう。みんな教えないといけない。教員は一生懸命で、子どものためにしたいので、本当に悩みます。でも、例えば、県内で同じ教科6社が教科書を出して、全部の学校が選んで使っていると、6社に共通して、黒字で書かれているところしか入試に出ません。自分の使っている教科書が黒字でも、他の教科書が黒字でなければ、それを出すことは当然出来ないわけです。はたで言うと、これが文部科学省の言う、基礎基本になります。そんないろいろな知恵を工夫しながら今日ご発言があったような自学自習ですとか、予習ですね。そのようなことに取り組んでいけば、子ども達の可能性さらに高めることが出来るのかな。と、思って伺っていました。

本当にありがとうございました。

**宮下市長：** 陰山先生、教育長はじめ、会場には小中学校の校長先生や先生方も、多くお見えになられています。是非激励のお言葉をいただければと思います。

**陰山氏：** 私自身も、校長をやり、教育委員会にも

関わってきて、一番強く思うのは、学校が学校だけで頑張っていると、それはもう消耗してしまうということですね。このように、市長さん自らが教育に関心を持たれ、そこに地域の方々に集まっていたいて、学校教育いかにあるべきかということを中期の課題としてやって行かれるというのは、教育というものが本当の力を持っていくということになりますので、この環境を活かして行かれるのがいいのではないかと、いうことを一番に思います。

それから、もう一つは、今日私が申し上げたことは、今迄の教育の常識からは相当外れたこと、新しいことだろうと思います。ですから、正直なところ戸惑っておられる方も多いと思います。私自身が戸惑いました。「なんなんだ、これは。」って。それを克服する一番良い方法は、飯塚市を参観されることです。最前線を見て最前線で動いている子ども達や教師や地域、教育委員会のマネジメント。文部科学省で一番考えたいことはここだろうと思います。現場を見ようとしない。ですから、良いこと言っているだけけれど、ボケているんですよ。文部科学省自身が地方の出張所を持たない、お客さんみたいな官庁ですから、他の官庁は出張所持っていますよね。国交省の出張所であるとか、そういうところがないところなので、非常にもともと構造的に弱いと。地方で頑張って良い実績を出しているところを、きちんと評価して、それを広めることをしてもらえれば、文科省の言っていることにも説得力が出ますし、頑張ってきたところはそれが評価されたということで喜びもします。それが無い以上は、例えば、むつ市の先生方が、良い刺激を受けたという点では、飯塚市、田川市を、出来れば市長さんや教育委員会の方、地域の代表の方が行かれて見られた方が良いと思います。私もここまで教育がダイナミックに展開するなんて思ってもいませんでした。私もびっくりしましたし、提案した教材が公費で全部に配られるというのが最高の喜びと同時に最高の恐怖でした。原点を見ていただく

ことが、教育とか教師の仕事の面白さにつながっていくと思います。ちょっと遠いですけど、行かれることをお勧めします。

**宮下市長：** 先生ありがとうございました。

今日は、会場からも1、2名ちょっと質問を承りたいと思いますので、司会の方お願いします。

**事務局：** それでは、会場の皆様から、感想、質疑等賜りたいと思います。時間の関係上2人ほどとさせていただきますが、よろしくお願ひします。発言の方はお名前をお聞かせ願ひします。挙手をお願いします。

はい、小さいお子様です。先生よろしくお願ひします。

お名前をお願いします。

**市民A：** 感想ですが、今日は、たくさんの時間を使い、私たちにわかりやすい言葉を使っただき、学力を上げるには、具体的にこういうことをすれば良いというのが分かってうれしかったです。

**事務局：** ありがとうございました。

わかりやすい言葉で、これから自分が何をすれば良いか分かったということです。

**陰山氏：** 一言だけ言っておきます。

難しいことをじっくりやるよりも、まず真っ先に基本的なことを高速にやること。それだったら出来るよね。そして、出来ることをよりできるようにすることが一番大事だということを心得ておいて下さい。自分のしたいこと、難しいことが自然に出来るようになりますから。頑張ってください。

**事務局：** ありがとうございました。

もうひとりお聞きしたいと思います。

お願いします。

**市民B：** 今日ありがとうございます。

先生のメソッドは、私の子ども小学5年生ですけど、低学年の頃に参考書とかドリルを探していたときに、出会えなくて、息子ですでに実証済です。今日の講演会があるのを知って非常に楽しみしていました。

先生のメソッドは単純に繰り返すことで、子どもが昨日出来なかったことが、次に日には出来ていて、タイムも取ってやっていると、どんどんタイムも短くなっていて、そうするとスピードですね。子どもがのめり込んで集中して、自分のものになっていくという様子を目の当たりにして、理にかなったやり方を提唱している方だなと思いました。

お聞きしたいと思ったのは、子どもは子どもらしく遊んで、家の中で基礎をしっかりやっていけば良いとか、田舎ならではの良さというのがあるというお話だったんですけど、先生、日本中活躍されていて、直感的に感じるむつ市という地域での役割とか可能性というものがどこにあると感じておられるかお聞きしたい。

**陰山氏：** 難しい話になりましたね。

昔と違って今は地方が直接世界につながっていける時代です。むつの良さというのが自覚されれば、世界を相手に様々な経済活動ははじめいろいろな良さを提供していくことが出来るようになる。東北地方全般に感じるのですが、野心がちょっと弱いかな。

**市民B：** 住んでいる人が魅力に気づいていないということですか。

**陰山氏：** そう言えばそうです。

例えば、お子さんが東大に行きたいと言ったら真っ先にどうします？

**市民B：** 東大を受けたいと言ったら、想像していないから・・・

**陰山氏：** そういうときはですね、こう言ってほしいです。

「良いじゃん、きっとやれるよ」

きっとやれると言ったら、子どもは、「は、やれるんだ」と思うわけなんです。そうすると前向きになれるんです。だめとか他に方向転換することがあるかもしれないけれど、子どもがやろうと思ったときに、どんどん前に向かっていくということを教えてあげてほしいです。

東北の方もいろいろ関わっているんですけど、そこは九州あたりに比べると弱いと感じます。北海道はまた違う。青森は独特の文化がありますよね。三内丸山からはじめ、東北をひと括りに出来なくて、県とか地域ごとの独自性をはっきりしているんです。これを逆説的に言うと、他のところとの交流はひょっとしたら弱いかもしれない。

良いことは活かしながら、交流するとかどこかに持って行くとか、一言で言えば開放性ですよ。突き詰めていけば国際性です。そのところは地方にとっては鍵になっていて、東北の人は村を出るということを覚悟した方が良いでしょう。そして、何人かの人は帰ってくるし残りもしますし。中途半端に大人の目先の利益にとらわれないことです。子どもが突拍子もない大きな夢を描いたら、目一杯応援してあげることが、東北地方には有効だと思います。東大だと、世界に通じていきやすいし、いきなりハーバード大狙ってもかまわないし、そういう突拍子もないことを子ども達に考えられるような、そういう大人達であってほしい。環境づくりとして。そういう風に思います。

**市民B：** ありがとうございます。

**事務局：** ありがとうございます。

**宮下市長：** まさかの児童からの質問ということで、すごくうれしく思います。質問ありがとうございます



ございました。

最後になりますけど、今の質問にもあったんですけど、自分たち大人が、どこかで自分たちがここまでしか出来ないを持っている。そこを取り払っていくことから始めなければいけないし、講演の中にもありましたが、学校の組織として6年間先生が変わっても同じような教育が出来るようにという話がありました。それは、もう少し高度なレベルで行けば、地域全体としても、教育委員会が、我々が支えて、どこの学校でも同じような教育ができるようにしなければいけないと思います。まさにむつ市の未来と教育が連動しているお話については、私の責任でもありますので、しっかりと考えてきたいと思います。今日発表してくれた子どももそうですけど、子ども達は私たちのむつ市の日本の未来を作ってくれていると思いますので、私たち、今日のお話を活かしてしっかりやっていきたい。また、これをきっかけにむつ市の方をご指導いただければと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

先生、最後一言お願ひします。

**陰山氏：** ありがとうございます。

私も青森の方好きなところですので、是非関わりさせていただきたいです。その手続きをしくしくやっていただければと思います。

市長おっしゃったとおり、むつ市に限らず日本全体が、所詮日本なんていう、ほんの20年前まではナンバー1ともてはやされていたのが、なんかこう内向き思考になっていますよね。そのところの風紀を変えるためにも、子ども達にも夢を持ってもらいたい。

現地の先生達にお願いしています。それは、自分たちが子ども達に対してどこに行っても恥ずかしくない、日本中、東京のど真ん中だろうが、ニューヨークだろうがどこでも通じる力を教えてきたと。そして君たちは一から身につけたと。そのことだけは信じて頑張ってくれと。どこへ行こうともこの地で力をつけた、つけて

もらったということを覚えていてほしい。そういうことを子ども達に伝えてほしいということをお願いしています。

やはり、私たちの生き方が子ども達の未来を決めるんだということです。

私の方も頑張っていきたいと思いますので、こちらこそよろしくお願ひしたいと思います。どうもありがとうございました。

**宮下市長：** ありがとうございます。

**事務局：** これをもちまして、第14回むつ市総合教育会議陰山英男氏講演会を終了いたします。どうも、皆様ありがとうございました。

本日の講演内容につきましては、要点をまとめ、むつ市ホームページに掲載したいと思ひます。

また、皆様のレジメの中にアンケートが入っていると思ひますので、こちらに御協力をお願ひいたします。

それでは皆様、お気をつけてお帰り下さい。ありがとうございました。